

1 現状・課題の整理

(1) 市民ミュージアムの教育普及事業の現状・課題

・本事業の中心的な機能である「ラーニング機能」に関連する取組を検討するにあたり、これまでの市民ミュージアムの教育普及事業の内容を参考とするため、学芸員へのヒアリングも交え、現状を整理し、課題を確認した。

■ 目的・方針（年報より）

学校や地域との連携を図るとともに、市民ミュージアムを身近に感じ活用してもらえるよう事業を展開する。

■ 主なターゲット層 ※ターゲット層の定めはなく、取組内容の傾向から導き出したもの

子ども、青少年（小学生～高校生）、障害者、高齢者、子育て世代、川崎の歴史や文化を学ぶ意欲のある人

| 活動の分類（年報より） | 具体的な活動の内容 | 学芸員からの意見 |
|------------------------------|---|--|
| 市民ミュージアムの活動に対する関心を幅広く呼び起こす活動 | <ul style="list-style-type: none"> 博物館プログラム（講座、土器づくり、史跡めぐりなど） 美術館プログラム（切り絵教室、映像制作ワークショップなど） 企画展関連事業（上映会、講演会、ワークショップなど） 学芸員ガイドツアー 学芸員研究発表 アトリエ解放 | <ul style="list-style-type: none"> 博物館・美術館プログラムは、毎年同じような内容のプログラムを実施している傾向にある。 被災後は、外部会場の使用条件にあわせてプログラム内容を変更する（プログラム内容にあわせて会場を探す）必要が生じている。※日程調整や、資機材運搬、会場設営にも労力を要する。 実施会場が毎回変わるため、市民ミュージアムの事業であることが伝わりにくい。 被災以降は博物館分野に関する事業の方が多く、美術館分野に関する事業があまり実施できていない。 |
| 子どもたち及び青少年の学習活動及び体験活動を支援する活動 | <ul style="list-style-type: none"> 総合学習プログラム（団体見学） スクールプログラム（学校出張プログラム、職業体験） 社会科教育推進事業 学校連携展示会 | <ul style="list-style-type: none"> 新たなプログラムを実施できていない（アートカードなど開発はしている）。 学校対応は出張授業（二ヶ領用水）に集中している。長年続いているものなので主軸とすることに問題はないと思われるが、現場のニーズも確認して今後の展開を検討していきたい。 特に被災後は中高生向け事業を実施できていないため、学校の先生方の意見を聞きながら事業内容を組み立てることが望ましいと考える。オンラインによる事業展開も視野に入れる。 |
| 全ての人に参加しやすい活動 | <ul style="list-style-type: none"> バリアフリープログラム（ママカフェ、かわさきつづらんど、ベビーカーツアー、視覚障害鑑賞ワークショップなど） 高齢者福祉プログラム（日本映画上映など） 異世代交流プログラム（昔あそび） ボランティア活動支援 | <ul style="list-style-type: none"> 被災後、事業数は減少したが、幼児、高齢者、障害者など、対象のバリエーションはとれている。ただし、外国人やその他生きづらいい人など、まだ対象のバリエーションを増やせる余地が残っている。 指定管理者制度導入以降、親子と子供向けのプログラムや障がい者・高齢者向けのプログラムが加わった。被災後に事業数は減ったものこれらは継続中。 |
| 高等教育機関との連携 | <ul style="list-style-type: none"> 大学連携事業 博物館実習 大学共同レスキュー事業 | <ul style="list-style-type: none"> 被災前に実施していた、展示会と関連した教育普及事業の展開は当面の間難しいと思われるため、それ以外の方法を検討する必要がある。 |

(2) 市民意見や社会的要請・変化から導き出される現状・課題

・これまでの検討において実施してきたワークショップ、アンケート、オープンハウス型説明会等による市民意見聴取や、第3回懇談会で整理した文化芸術を取り巻く社会的要請・変化を踏まえ、コミュニケーション事業の展開にあたり関連性が深いと考えられる意見や事象等を次のとおり整理した。

| これまでの市民意見聴取から導き出される現状・課題 |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 子どもや若年層に配慮されたミュージアム活動を望む意見が多く挙がっている。 文化芸術が身近に感じられるような、誰もが親しみ、楽しみやすいプログラムのほか、普段から自主的に文化芸術活動に携わっているような意欲・関心の高い市民のニーズにも対応することが求められている。（自主的な文化芸術活動をサポートするなどして、市域の文化芸術やその担い手を育てることが重要と考えられる。） 異なる世代がともに体験を共有し、知識や経験を伝えられるような機会づくりが求められている。 文化芸術を介して市民や地域の交流を育む拠点となり、様々な主体をつなぐ存在となることが求められている。 少子高齢化が進む中、上の世代が下の世代とともに体験を共有する機会や知識や経験を伝えられるような交流の創出が求められている。 まちづくりや地域の魅力の発信、生田緑地内の魅力向上に貢献していくことが求められている。 |
| 文化芸術を取り巻く社会的要請・変化から導き出される現状・課題 |
| <ul style="list-style-type: none"> 博物館法の改正に伴い、多様な地域的課題・社会的課題への対応や、他の博物館を含む地域の多様な主体との連携が努力義務となっている。 「文化芸術推進基本計画」や「教育振興基本計画」、「文化経済戦略」では、文化芸術を通じた次代を担う子供たちの育成や、地域の文化継承の担い手の育成が推進されている。 文化芸術の担い手の育成だけでなく、障害者の様々な文化芸術活動をサポートする人材の育成や、様々な面でミュージアムの運営のサポートができる人材を育成することも重要となっている。 生きづらさを抱えた人などに対する配慮など、社会的包摂や健康・幸福の実現につながる活動を強化していくことが求められている。 |

(3) 具体的な活動内容の検討に当たって踏まえるべきポイント

・以上の整理を踏まえ、コミュニケーション事業における具体的な活動内容を検討する上では、特に次の点を考慮する必要があると考えられる。

- ① 実施目的や対象、実施場所等を明確化した柔軟なプログラムの企画・実施を実現するスキームづくり
- ② 次代を担う子供たちへの学び方の提供を目的とした活動の継続
- ③ 中高生や、外国人、その他生きづらさを抱えた人（貧困家庭、孤独・孤立に苦しむ人など）など社会的包摂に配慮しながら多様な層への対応
- ④ 生田緑地内他施設や高等教育機関、教育委員会関係機関など、様々な主体との共創・連携を通じた、地域の魅力向上への貢献

2 コミュニケーション事業の具体的な内容（案）

(1) コミュニケーション事業の取組の方向性

- ・ミュージアムが「モノ・ヒト・コトをつなぐ」媒介となり、対話を通じた双方向の関係で、人々の自由な発想を育み、主体的な学びや新たな発見をともに創り出す活動を行う。
- ・年齢や障がいの有無などを問わず、多くの人々が学び、考え、表現する機会を創出する場を生み出すことで、人々の芸術文化活動を活性化し、心身の健康を支える。
- ・子ども、青少年、障害者、高齢者、子育て世代、川崎の歴史や文化を学ぶ意欲のある人など、これまでの教育普及事業でアプローチしてきた層への取組を継続しつつ、これまでアプローチが十分ではなかった層（外国人やその他生きづらさを抱えた人、若い社会人層、歴史や文化への無関心層など）に対する取組についても、徐々に広げていく。

(2) 「ミュージアム（拠点施設）」と「まちなかミュージアム」での特徴的な活動

・「ミュージアム（拠点施設）」と「まちなかミュージアム」で実施するコミュニケーション事業の特徴について、次のとおり整理した。

| ミュージアム（拠点施設） |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ● 実物（モノ）に触れるなど、ミュージアムならではの体験・体感を通じたコミュニケーション機会の創出 ● 展示空間（常設展示、企画展示、収蔵庫展示）を活用したプログラムの実施（展示解説、学校団体の見学など） ● 収蔵品や学芸員の知見などミュージアムのコンテンツを活用した多様な学びの場の創出 ● 拠点施設の空間（多目的スペースなど）を活用した様々なニーズに対応するプログラムの実施 ● 生田緑地内の他施設と連携した活動や生田緑地の魅力向上に関する活動 |

| まちなかミュージアム |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ● 実物（モノ）を使わなくとも、市民が文化芸術を楽しみ、探究できる活動の展開 ● アウトリーチセットやモバイルミュージアムのセット等を活用した、ミュージアムのコンテンツの地域への発信 ● 拠点施設に足を運びづらい方に向けたプログラムの実施（社会福祉施設など） ● 地域で活動している市民や団体、施設などと連携した活動の展開 ● 市内各地域の特徴や状況を活かした（踏まえた）柔軟なプログラムの実施 ● まちなかでの市民の文化芸術活動のサポート |

(3) 段階ごとの具体的な事業内容（案）

・「基本計画策定後から開館までの間」と、「開館後5年程度」の2段階に分けて、考えられる主な事業を次のとおり整理した。

開館まで

1. 現在市民ミュージアムで行っている「IN ACTION」の取組の継続
2. 「ことラー」が主体となって行うまちなかのアート・コミュニケーション活動のサポート
3. 市民ミュージアムの活動を支える市民ボランティア組織との連携の緩やかな再開の検討
4. 市内の学校や他文化施設（博物館、図書館・市民館等）とのネットワークの拡大及び各所でWSや講座を実施
5. 生田緑地他館と連携した新たなプログラムの開発
6. 生田緑地のイベント（マルシェなど）での屋外プログラムの実施（アート制作、史跡散策など）
7. 資料のデジタルアーカイブ化と、それを活用した新たな層へのアプローチ（中高の授業での利用、SNSでの発信など）
8. 社会福祉施設など、新たな対象層・施設に向けた出前講座やアウトリーチセットの開発・活用
9. 文化観光など、所管局の枠を超えた事業へのチャレンジ
10. ミュージアム・ファンの獲得や各所での活動がミュージアム事業であることを伝えるための広報強化（シンボル、キャッチフレーズ作りなど）
11. 実施事業ごとに評価・検証を行いながら、効果の認められる手法を継承していく

OPEN

開館以後5年程度

1. 開館までに行ってきた事業の検証・見直し及び継承・発展
2. 被災前に館内で実施していた各種プログラムや職場体験等の精査・再構築
3. 拠点施設やまちなかでの、市民が主体となって行う学習や創作についての相談の場づくり
4. 拠点で行う企画展等と連動したまちなかでのイベント実施。拠点のPR。
5. 生田緑地内他館や周辺大学、商店街等と連携したエリア全体の文化観光事業の実施
6. 地域の市民団体等と連携した新たなプログラムを拠点やまちなかで展開
7. 川崎市内の医療・社会福祉機関と連携したプログラムの検討（「ミュージアム処方箋」など）
8. 様々な層の市民が集えるでのイベントの実施（多文化理解、世代間交流など）